

# 奈良県におけるキクベと病の発生状況および 殺菌剤と高温・温湯処理による防除効果

奈良県農業研究開発センター よしだ 芳田 かんだい 侃大\*・あさの 浅野 しゅんすけ 峻介

## はじめに

奈良県におけるキクは、主に露地栽培で5~11月にかけて収穫され、栽培面積は103 ha、生産量は4,760万本と全国第6位の生産規模を誇っている（農林水産省、2023）。本県のキク生産では、小ギクが全体の9割を占めており、大中輪菊では二輪菊やミス菊といった特色のある品種が生産されている。キクは本県の農業を牽引している農産物であるリーディング品目に位置づけられ、行政施策の面からも積極的な振興が図られている。

2017年、奈良県内でこれまでにほとんど確認されなかったキクベと病が、県内の主要産地である平群町や葛城市で発生し問題となった。本病による症状は、葉表に黄変または黄褐色の斑点が認められ、高湿度条件では葉裏に白色または褐色の粉状菌叢が肉眼でも容易に観察される（岸、1998）。また、品種間差が著しく、弱い品種では下葉から枯れ上がる（宮城県、2017）。キクベと病菌はキク科植物に寄生することや形態的な特徴から、卵菌類に属する *Peronospora danica* とされていた（坂口ら、1980）。その後、日本で採取されたキクベと病菌の分類学的再検討が行われ、分子系統解析と形態観察の結果、*Para-peronospora minor* であることが提唱されている（川口ら、2019）。

キクベと病は、1979年に国内では長崎県で初めて報告されたが（坂口ら、1980）、それ以降は長らく本病の発生に関する報告は見られなかった。しかし、奈良県での発生と同時期である2016、2017年に宮城県、大阪府、兵庫県、および広島県でも発生が確認されている。

本病に関する知見が少ないことから、防除の基礎情報とするため、奈良県での発生状況と薬剤散布および挿し穂への高温・温湯処理による防除効果について紹介したい（YOSHIDA et al., 2019）。

## I 2017年の奈良県におけるキクベと病の発生状況

2017年の1月初旬、奈良県平群町にある無加温ハウス内のキク親株にてキクベと病が確認された。そこから大きな拡がりは見られなかったものの、同年4月に入ってから急激に発生が拡大し、ハウス内のキクだけではなく、露地圃場の本圃や親株圃場でも多発した。

詳細な発生状況を確認するため、2017年の4月17日に奈良県平群町の小ギク4圃場において、各品種それぞれ100株を対象にキクベと病の発病株率と症状について調査を行った。調査した13品種のうち、6品種では全く症状が見られなかった（表-1）。一方で発病のあった品種では1品種を除き、発病株率は95%以上と高かった。症状は既報の通りで、主に下葉から中位葉にかけて

表-1 奈良県平群町におけるキクベと病の発生状況

圃場	品種	発病株率 (%)	症状
A	寿光	100	上位葉まで枯死および植物体の枯死
	いろどり	100	中位葉まで枯死
	精かなた	0	
	不明	0	
B	清姫	95	中位葉まで褐変
	白霧	97	中位葉まで褐変
	精かなた	0	
	あかね はるき	0 0	
C	秀もくば	100	中位葉まで褐変
	京丸	100	中位葉まで褐変
	白霧	100	上位葉まで枯死および植物体の枯死
	はくたか	100	中位葉まで枯死
	いろどり	12	中位葉まで褐変
	精かなた	0	
	川風 夏丸 紅ひかり	0 0 0	
D	清姫	100	中位葉まで褐変
	不明	0	

2017年4月21日に奈良県平群町の小ギク露地圃場4地点を調査した。

1品種当たり100株を調査し、発病株率を算出した。

Occurrence of Chrysanthemum Downy Mildew in Nara Prefecture and its Control with Fungicide and Thermotherapy. By Kandai YOSHIDA and Shunsuke ASANO

(キーワード: キクベと病, 薬剤防除, 高温・温湯処理)

\*現所属: 奈良県食と農の振興部畜産課